昭和批評大系

昭和10年代

番町書房

昭和批評大系　第二巻（昭和10年代）

目次

「国際性」と「帰還」の季節　佐伯彰一　二

第一部

藝術の思想性について　三木清　三〇
二葉亭四迷論　中村光夫　三九
閏二月二九日　中野重治　六三
現代の頽廃について　河上徹太郎　六七
日本の橋　保田與重郎　七三
散文精神について　廣津和郎　八六
明治の精神
—二人の世界人—　保田與重郎　九九
村山知義論　本多秋五　一二
國民文學論の根本問題　淺野晃　一三
ドイツ文學理論と方法
—其の核心、質及び戰ひについて—　芳賀檀　一四
所謂批評の「科學性」についての考察　戸坂潤　一五

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

日本への回歸
—我が獨り歌へるうた—　萩原朔太郎　一六一

島木健作論　窪川鶴次郎　一六四

明治文學評論史の一齣
—『破戒』を繞る問題—　平野謙　一七四

日本的性格
—傳統文化と現代文化—　長谷川如是閑　一八七

滅びの支度　龜井勝一郎　一九二

歴史について　小林秀雄　一九七

政治と文學　岩上順一　二〇四

日本文藝の樣式
—日本文藝學の課題—　岡崎義惠　二二

現在の文學の立場
—現在に於ける文學の立場—　山室靜　二二

日本文化の問題　西田幾多郎　二六

轉轍
—昭和の婦人作家—　宮本百合子　二三

轉向に就いて　林房雄　三九
茂吉の「白秋の歌一首」　中野重治　二六三
短歌寫生の說　中野重治　二七四
芥川龍之介論（序說）　福田恆存　二八九
日本文化私觀　坂口安吾　三〇七
無常といふ事　小林秀雄　三二六
ヴァレリイ　石川淳　三二八
司馬遷
—「史記」の世界構想　序說—　武田泰淳　三三三
梶井基次郎
「近代」への疑惑　山本健吉　三三五
鷗外の精神　中村光夫　三四三
—鷗外探求—　唐木順三　三五三
魯迅
—序章　死と生について—　竹內好　三六九

第二部

『文藝懇話會』創刊の辭　三七八
『人民文庫』創刊號編輯後記　武田麟太郎他　三七九
「夜明け前」合評會　村山知義他　三八〇
描寫のうしろに寢てゐられない　高見順　三九七
『批評』創刊號編輯後記　山室靜他　三九九
話の屑籠（抄）　菊池寛　四〇〇
現代詩の本質に就て
—四季座談會—　萩原朔太郎他　四〇六
池谷信三郎賞受賞發表（第一回）　小林秀雄他　四一三
人民文庫・日本浪曼派討論會　高見順他　四一四
『文藝文化』創刊の辭　池田勉　四二四
映畫藝術の行方
—藝術の孤獨性の否定—　今村太平　四二四
蝸牛の戯言　眞船豐　四二九
小說「土と兵隊」　武田麟太郎　四三三

伊藤整覺え書　平野謙　四三七
小說と批評　川端康成　四四〇
『批評』創刊號卷頭言　西村孝次　四四七
文學者の精神　北原武夫　四四七
「宮本武藏」讀後感　正宗白鳥　四五三
『現代文學』創刊號編輯後記　四五六
經堂襍記　青野季吉　四五六
『昭和詩鈔』序言　萩原朔太郎　四六一
「夫婦善哉」感想　織田作之助　四六三
預言と回想　蓮田善明　四六三
文學と時代の統一　青柳優　四六六
『萬葉の傳統』展望　小田切秀雄　四七一
歷史と小說　桑原武夫　四七三
小說の復活　伊藤整　四七六
中國文學の廢刊と私　竹內好　四八〇
日滿文藝の交流　淺見淵　四八七
『近代自我の日本的形成』序　矢崎彈　四九〇

『四季』終刊の言葉　神保光太郎　四九三
『花ざかりの森』跋に代へて　三島由紀夫　四九四

研究ノート

第一部　研究ノート　大久保典夫　四九七
第二部　研究ノート　岡保生　五二九
口絵写真解説　保昌正夫　五四五
年表（昭和10年代）　高橋春雄　五五七

装釘　上口睦人

凡例

一、収録作品を第一部・第二部に分け、相互に補足しあって、有機的・立体的な批評史を編成するようにつとめた。

一、第一部にはおよそ主流的な論文をあつめ、第二部では資料的な面に重点を置いて編集した。

一、本文は原文の正確な復原につとめて、できるかぎり初出にしたがった。

一、作品の配列は、おおむね発表年次順によった。

一、各作品の用字、かなづかい、句頭などは、原則として原文のままとし、傍点・ふり仮名などは編集部で適宜取捨した。

一、研究ノート・解説などに際しては、書名・人名・引用文に限り、正字・旧かなづかいを用いた。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

昭和批評大系　第二巻（昭和10年代）

「国際性」と「帰還」の季節

佐伯彰一

I

一九三〇年代という時代があった、といってよい。たんに便利な年代区分というのではなく、一九二九年秋のアメリカの大恐慌を開幕の合図として、スペイン内乱という劇的クライマックスへともり上り、やがて一九三九年夏、なだれこむように二次世界大戦のうちへとのめりこんでいったこの十年間には、まるでクリオの神の手で仕組まれたドラマのような統一性がそなわっている。

しかも、この統一性は、たんに時間のみに限られなかった。ウォール街の恐慌は、ただちに大規模な経済不況をよびこみ、その余波はアメリカ以外の国々にまで及んでいったのだし、また一方ドイツにヒットラーの急速な政権掌握があれば、あたかも物の響きに応ずるように、ソ連にスターリンの独裁体制の確立が起っている——少くとも今日の眼でふり返れば、この二人の独裁者の動きには、不思議なほどの照応性、共通性がみとめられる。そして一九三九年における、この両者の不意打ちの握手は、遠い極東の島帝国の内閣を瓦解に導いたのである。わが平沼内閣が「欧州情勢は、複雑怪奇」といったナイーヴな声明を発して、総辞職したのは、二人の独裁者の思いがけぬ提携、「独ソ不可侵条約」の締結から、わずか五日後の出来事であった。そして、その四日後に、ドイツはポーランドに侵入を開始し、ソ連もまた十数日以内にポーランド東部の占領を完了している。

いや、世界史年表のおさらいをしている訳ではないのだが、この時期には、世界は文字通り一つに結ばれていた。「国際性」という鎖が、あらゆる国々をいや応なく数珠つなぎに結び合わせていた、といっていい。この際における「世界は一つ」は、奴隷たちをつなぎとめる鉄鎖に似ていて、甘やかなスローガンの趣きは、まったくみとめられなかった。否応いわさぬ、暴力的なレヴェルでの一体化であった。

その明確なきっかけが、恐慌という名の経済現象だったにしろ、スペイン内乱への「参加」という革新イデオロギーだったにしろ、あるいは又独裁者の猛々しい政治行動だったにしろ、ともあれ、これは世界一体化の時期であり、世界全体が、あたかも

電気衝撃療法におびえてそそけだつ神経の束のように一様な痙攣と過敏さを露呈した時期であった。

昭和十一年は、一九三六年にあたる。スペイン内乱勃発の年であり、わが国では二・二六事件の年であった。アメリカでは、ルーズヴェルトのいわゆる「ニュー・ディール」政策がようやく危機収拾の効果を示し始めた時期であり、この年の大統領改選には、相手の共和党候補をアメリカ史上前例のない大差で破った年でもある。この頃から、コミンテルンによる運動方針の転換のしるしが、各方面に表立ってきて、この年、共産党のアメリカ大統領候補（そういうものが、あったのだ！）のスローガンは、「コンミュニズムは二十世紀のアメリカニズムだ」という、物柔らかな、珍妙なほど柔らかすぎるものだった。「共和党員、民主党員、社会党、またどの党にも属しない人々にも友愛と協調の手をさし延べよう」という無差別的な低姿勢ぶりは、ほかの誰よりも共産党員自身を、また同伴者的な知識人たちを驚かすに十分であった。これがつまりは、いわゆる「人民戦線」のアメリカ版に他ならなかったのだが、こうした「愛される共産党」ぶりは、たしかに一方で党員の増加をもたらしながら、おのずから速やかな自己崩壊のきっかけとなったのは止むを得ない。こうした方針転換は、文学批評の面にも反映して、たとえば、共産党系批評家がつい先ごろまで「ナチス、少くとも、ナチスの芽」として語調はげしく攻撃していた詩人アーチボールド・マクリーシュを、にわかに一転して「美しく感動的」などと賞め上げるということまでおこった。手の裏返したような変節は、いつの場合にも、ある種の滑稽さを伴わずにはすまぬものであり、絶対的なイデオロギー信仰にとって、滑稽感ぐらいこわい敵は又とないだろう。鉄板を侵蝕する酸性液のように、敏感な知識人たちの内側に滲みいってイデオロギー信仰を次第に食い破り始めたのは、当然といわねばならぬ。すなわち、コンミュニズムに対する幻滅の季節が、すでに始まったのである。

もっとも、一九三六年はスペイン内乱の年であり、疑惑や批判が正面切って投げつけられた訳ではなかった。知識人たちというのは、じつの所意外なほど時代の趨勢に敏感、かつ順応的な生き物であって、彼らの反時代的な姿勢そのものが、しばしば流行の衣裳にすぎない。ついしばらく前の「資本主義」攻撃を、今は「ファッシズム」攻撃に塗りかえただけで、「人民戦線」的な路線を、忠実なおうむなみにくり返すという知識人の数は、当時のアメリカでも決して少くはなかった。まず率直に語り出したのは、勇気ある少数者であり、アメリカ文学に即していえば、まず批評家のエドマンド・ウィルソンと『スタッヅ・ロニガ

ン』三部作の作家ジェームズ・ファレルの名前があげられる。そして、彼らの非順応的な、勇気ある発言が、はっきりとした形をとったのが、ともにこの年、一九三六年のことであった。その前の年、ソ連に出かけたウィルソンは、率直な旅行記を発表し、またファレルは、『文藝批評に關する覺書』をまとめた。社会主義思想史の研究というテーマに心惹かれ、モスクワの「マルクス－エンゲルス－レーニン研究所」での資料研究を直接の目的としたウィルソンは、期待と好意とにみちた旅行者として出かけたのだが、モスクワに腰を落ち着け、ロシヤ人ともかなり親しくつき合うにつれて、理想の「裏切り」という他ない実例に次々と行き当って、心かき乱されざるを得なかった。いわばレーニンの理想と、スターリンの事実とのいちじるしい乖離であり、ウィルソンは、この時期にいち早く、スターリン主義の腐臭を嗅ぎつけ始めていたのだ。彼は弾劾し、攻撃するよりは、戸惑い、かつ危惧しているのだが、「神化」というに近い個人崇拝の行きすぎについては、明瞭に警告を発することを忘れなかった。

もちろん、ウィルソンひとりの、時代を立ちこえ、先がけた洞察力を讃えようというのではない。この一九三六年には、他ならぬジイドの『ソビエト紀行』の発表された年でもあって、この両者の観察と意見には、期せずして符節を合するところが、きわめて多いのである。イデオロギー信仰に縛られない人間の眼のとらえるものが、おのずから似通ってくるのは当然にすぎないが、太西洋を隔て、資質も背景もいちじるしく異なるジイド、ウィルソンにおけるこの相似は、同時に、三〇年代という時代の「国際性」を証し立てるもう一つの実例でもあったろう。

ジイドの『紀行』は、わが国でも直ちに翻訳されて、ジイドの「再転向」としてにぎやかな論議をよんだが、ひろい「国際的」なパースペクチヴの中におき直して見れば、スターリン主義的な現実に対する反撥、コンミュニズムに対する幻滅は、なにもジイドひとりの「作家的良心」の問題ではなかった。これは日本に限らない話だが、「国際性」という強固な鎖にしっかとしばりつけられながら、人々は案外、みずからをしばる鎖には気がつかぬものだ。そこで、スターリン的な「事実」に対する反応という共通性にまず注目した上で、改めてそれぞれの観察者の個性や良心の独自性に目を向けるという、基本的な手続きが忘れられがちになる。とくに当時のわが国の場合、もっぱらジイド個人の「再転向」として受けとろうとする論じ方ばかりが、目立っ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com